



連載エッセイ

新谷尚紀

民俗学者

第1回

# お金には、古代からの日本の精神世界が息づいているのです。

日ごろ使っているお金には、実はあまり知られていない、古代からの日本の精神世界が息づいています。そして私たちがお金を扱うとき、知らず知らずのうちに脈々と受け継がれたお金への畏敬が表れた行動をしているのです。単なる経済的な道具ではない、「お金」の不思議なパワーについてお話しします。



財布の中をのぞいて、心細い気持ちになったことがあるでしょう。私などはしよっちゅうです。あといくらあるのか、この金額で何が買えるか、あれを買ったらいくら残るか、このお札を出せばおつりはいくらか。お金の計算は、誰もがさつとできるほど身に付いているものです。また、初詣のときに、こんなはした金を投げてこんなにたくさんさんの願い事をするなんて、虫が良すぎる、なんて考えたことはないませんか？ 私たちの生活の中で、お金は価値の尺度として大きな位置を占めています。

## 貨幣は危険な力をもつものとして生まれた

貨幣(お金)というのは、確かに価値の尺度ですね。これだけあればこれを買えるというように、あらゆるものに価値尺度を与えてしまう道具なんです。でも実

は、貨幣は単なる経済的な道具ではなく、一方で経済外的な機能ももっているのです。

貨幣の起源は、ヨーロッパではリディア(紀元前7〜6世紀・現トルコ西部)のエレクトロン貨幣がその最初期のものですが、古代中国ではもっと古く、新石器時代晩期(紀元前40〜30世紀)の寶貝・子安貝からです。その寶貝は、はじめのうちは古いを行うト骨が副葬されているような、宗教的な人物の遺体の口内や股間から見つかっています。

それが、やがて商(殷)の時代(紀元前1756〜1050年)の後期からは、王や王妃の墓から大量に発掘されるようになりまます。それは、中央の王が地方の族長に対して与えるものでもありました。寶貝は、もともと宗教的で神秘的な、危険な力を秘めたものとされていたため、王がそれを下賜するときには、その人物

がそれにふさわしいかどうかを占った、という事実を示す甲骨文字や青銅器の刻文がたくさん見られます。寶貝は、王がああ世とこの世の両方を支配する道具であったのです。

そのように権威の象徴として与えていたものが、やがて経済の道具として使用されるようになったのは西周時代(紀元前11世紀中頃〜771年)の末期からです。青銅器の刻文に「寶貝80朋の価値をもつ玉璋、皮衣」などと書かれるようになってきます。つまり、もともとは宗教

的な道具であったものが、経済的な道具としての働きをもつようになったのです。

## 死の発見というビッグバン

ところで私たちホモサピエンス、人間の、ほかの動物と違うところは何でしょうか？ それは、水原洋城氏も指摘しているように、『猿楽漫才』光文社「死」を発見した種だということ。サルは死を理解していません。発見していません。だから葬式をしません。私たちの遠

い先祖は、死を発見し概念として共有していききました。死の発見により、初めて靈魂觀念と他界觀念が誕生します。つまり宗教が誕生したのです。生理である飲食や生殖は、世界各地の社会でほとんど差異がありませんが、死が発見された文化であるからこそ、死への対応は土葬や火葬や風葬などそれぞれの社会によってさまざまなのです。

そして、死の発見は老いるという概念、そして死ぬまでの計画的な人生を考えるというところから、科学の誕生をも意味しました。またそれは生の発見・性の発見でもありました。どこから生まれて来たのか、その問いと観察から、男女の性がタブーとなったのです。『新約聖書』のアダムとイヴの神話はそれをよく物語っています。

このように死の発見というのは、宗教、時間、科学、生、性といった概念の誕生が次々と起こる、まさに精神世界のビッグバンだったのです。そのときです。王が誕生します。行ったこともないのに、想像力をたくましくした者たちの間から、死後の世界や靈魂の世界のことを説く人物が現れます。それが原初の王です。その王は卜占ぼくせんという方法で未知の世界を讀

み解こうとします。その王の道具として、頭幽けんゆうを含めての空間をはかるための貨幣と、時間をはかるための暦が誕生したのです。

ここでいう貨幣の誕生とは、「貨幣素材」の誕生という意味ではなく「貨幣形式」の誕生という意味です。かつて、今村仁司氏が指摘したように(1998年、国立歴史民族博物館フォーラム『お金の不思議—貨幣の歴史学』における、「貨幣とはなにか?」より)、貨幣というのは人と人とを媒介する「形式(TORIFORM)」と経済的道具としての「素材(prototype/マテリアル)」とから成り立っています。そして、実は貨幣の本質は「形式」にあり「素材」にはありません。「形式」は一種の独特な空虚な空間です。ですから、その空虚な「形式」には、何でも「素材」として投入することができます。金銀銅などの金属はもちろん、牛や羊、米でも絹でも、石でも貝殻でも、何でも入ります。古代中国の宝貝は、つまりは、その貨幣の「形式」の誕生に立ち会っていたモノであり、自らが貨幣の「素材」となる前と、なるときと、なった後とを全て体験している不思議なモノなのです。



## あらゆる罪悪も災厄も 吸い付ける貨幣の威力

宝貝は、この世とあの世との間をつなぐものと古代人が考えた女性の体の形象として、霊的な力をもつと信じられました。その宝貝が貨幣の原初ですから、貨幣はあの世、つまり死の世界と強く結びついているのです。

貨幣とは霊的な力を持ち、あらゆる罪悪も災厄も全部吸い付ける道具とされてきました。ケガレを吸引する道具なのです。ケガレというのは生命活動に危険をもたらすもの。疫病、汚いもの、犯罪、暴力、不幸……「死」そのものは、ケガレの最たるものです。貨幣はそれらを磁力をもって吸い取ろうとします。人々は、ケガレをたっぷり吸い取らせた貨幣を、自らの祓え清めのために神社や寺院で賽銭として投げます。願い事を叶えてもらうために奉納するものではないのです。願い事を叶えてもらおうと「どうかお願いします」と差し出すお金を、誰が裸銭で、しかも投げて渡すでしょうか。神社仏閣は、ケガレを吸い取ったものを集めて、それを清める場所なのです。

そのような、あらゆるケガレを吸引する不気味な道具である貨幣を、長いときを経て人々は感覚的に恐れているために、日本人は貨幣に対して少し神経質でした。現金にはある種の抵抗感があり、現金払いという歴史があまり普及しませ

ませんでした。また、人にあげるときには、祝儀袋に包んだり、新しいピン札を用意したりして、できるだけピュアな状態で、というのが今でも無意識にあるのです。

### ケガレからカミへ

ケガレをたくさん吸引した貨幣は神社や仏閣への賽銭としてあげられ、人々のケガレが祓われる。すると逆転現象が起こります。こんどは縁起物に変わる。例えば厄年に、厄払いのためにお金をまくという風習が、全国各地に残っています。厄をたっぷりとなすりつけられたお金を、集まった人々は我先にと拾います。そんなものを拾っては人の厄を背負ってしまったのではないのでしょうか。ところが、厄を吸い込んだお金は地面に落ちたとたん

に浄化され、こんどはありがたい縁起物になっていくのです。ケガレが祓え清められて無化するのではなく、祓えやられて逆転する。そうしたメカニズムが実はほかにもいっぱいあります。道祖神などの藁人形なんか、人々の体の悪いところをよりつけ集めて村境に捨てられたものですが、それが逆に村人を疫病から守る神様になる。海で死んだ人を葬り弔えば豊漁の恵比壽様になる。草履をほかの人が拾って履けば足が丈夫になる。蛇の抜け殻を財布に入れておくとお金がたまる。馬糞を踏むと背が高く

なる、足が速くなる、などといえます。私なんか子どもころ運動会の前に馬糞を踏みにいきました。実際の効果はありませんでしたが(笑)……。そういう例はいっぱいあります。エネルギー不滅の法則のように、祓えやられたケガレは無化されずに、そのパワーが逆転して再利用されるんです。

ケガレの逆転は、神話の世界でもみられます。死の国、黄泉の国から逃げ帰ったイザナギが、穢れた左目を洗い清めるとそのとき天照大神が生まれ、右目を洗ったら月読命が、鼻を洗ったら須佐之男命が生まれた、とされています。日本の神は、天地の創造神ではなく、ケガレを祓え清めるときに逆転して生まれてくる神々だと神話は語っています。キリスト教やイスラム教とは異なる、面白い特徴があります。

### 財布の中に 生きる元気が

財布の中のお金をのぞき、ケガレを吸引する装置なんだとちょっと考えてみてください。財布の中に不思議な力が満ちたように思いませんか？ ケガレに苦しんでいる人はそれを貨幣になすりつけ、賽銭箱に投げ込んでみましょう。ケガレを再利用し、そして上手にリセットできる人は生産性が高く、いい仕事ができるのです。遠い先祖が発見した生きる「時間」を、ゆったり楽しみましょう。



新谷尚紀 しんたに・たかのり

民俗学者。国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学名誉教授、國學院大学教授。現在、國學院大学大学院と文学部で民俗学の後継者育成に努めている。「民俗学とは何か―柳田・折口・渋沢に学び直す」「日本人の春夏秋冬―季節の行事と祝いごと」など著書多数。